

「阪神高速 未来へのチャレンジプロジェクト」 第4回助成・事業実施報告書

1. 基本事項

団 体 名	能楽と郷土を知る会		
事 業 名 称	プロと子供たちで紡ぐ地域能楽の伝統 民話狂言の新作	助成額	50万円
申請事業の概要	地域の民話を基にした新作狂言の創作・上演。その民話狂言を、プロの能楽師狂言方と、彼らの指導を受けた地元の子供たちが共に演じることを通して、地域の歴史文化を活性化し、次世代にその価値を伝える。		
申請事業の目的	地域の子供たちが、地域の歴史遺産を自ら演じ、または見ることで、三田の歴史を知り、自分たちと地域との繋がりを意識し、郷土愛を育むことで、地域の歴史文化を有機的に継承し、地域文化・ネットワークの再活性化を図ること。		
関連するSDGs目標	目標 4「質の高い教育をみんなに」 目標 11「住み続けられるまちづくりを」		

2. 助成事業の実績・成果等について

1月から準備を開始した。2月22日に三田市立図書館（本館）にて、子どもたちが参加した形にて、「三田の民話をさがそう 新作狂言づくりのための第一歩」を開催、参加者が調べ見出した三田の民話の中で、新作狂言の題材として、「うばが谷の水」をテーマに選ぶこととなった。

この話は、三田市藍本に伝わる民話で、以下のような内容を伝えるものである。

凶作の年、自分がいなくなれば、少しでも家族の助けになると考えた老女は、身を投げるため、山中のうばが谷へと向かう。その意図に気付いた老女の息子は、母を追いかける。追いついたが、母は聞き入れない。「母の最後の頼みが聞けないのか」そう言われた息子は、仕方なく母を背負ってうばが谷に向かう。母は息子が帰り道に迷わぬよう、目印に枝を折った。「奥山に手折りし折るは誰のため我が身を捨てて帰る子のため」という和歌はこのことを詠んだものである。うばが谷の清水で、親子の別れの杯をかわすが、たまらなくなった息子は、母を無理に連れ帰るのだった。

この民話は「棄老伝説」、つまり老いた親を捨てる話の一種である。当日この話を見出した参加者の子どもは「しんみりとした内容で狂言に合うかわらないけれど、作品にできたらうれしい」と発言している。

3月よりこの民話を元に台本の作成に入ったが、前述の発言通り、狂言として上演可能な形への制作が難航。狂言として上演してくださる大蔵流狂言方、善竹忠亮氏・牟田素之氏・小林維毅氏と打合せをした結果、①狂言は「笑いの芸能」であるため、あまり深刻な話にはしたくない。②母子の心の思いやりを描くとともに、笑いの要素も入れたい。以上2点の方針を決定した。

その結果、老母は家族のために死ぬと言いながらも、実際いざ死ぬとなると、覚悟ができず、いろんな死に方を想像しては「木に首をくくって死ぬのは息が苦しそうだ」「草刈の鎌で首を斬るのは痛そうだ」などと言って、結局死ぬ役を設定。それでいても、追いかけて来た息子の手前、慌てて死ぬふりを再開し、それを止めようとする息子との間にひと悶着ある形を舞台化する。さらに元の話にはいない「孫（老母の孫、息子の子）」の役を設定し、子どもだけに遠慮せず本質に切り込む言葉を言わせることで、祖母が、表向きにも死ぬのを諦めさせる



形とし、話の深刻さよりは、笑い家族愛の話として成立させる形とした。

これら台本の制作と並行して、8月3日に三田市立有馬富士共生センターにて「こうべさんだ伝統文化体験フェスタ」を開催し、狂言のほか能・能楽・雑子・講談・浪曲・華道などの体験の機会を作った。8月5日～27日には三田市ウッディタウン市民センターと三田市桑原・欣勝寺を会場に「こうべさんだ能・狂言・講談子ども教室」を開催、それぞれの芸能を実際に稽古し、発表会をして地域にその成果を見せる機会を作った。同時並行だが、8月19日に三田市富士ヶ丘コミュニティセンターにて「こうみん未来塾『能・狂言ってなに?』」と題して、地域住民向けの能と狂言の講座・ワークショップを狂言方・小林維毅氏を招いて開催した。これらの地域向けの狂言発信を受けて、11月24日に、三田市桑原・欣勝寺にて、「子どもとふれる狂言 鑑賞と体験 こうべさんだゆかりの笑いの伝統芸」を開催し、狂言についての解説と体験、そして新作狂言《うばが谷》のプロによるプレ上演（試演）を行った。また並行して10月2日～12月18日に、三田市ウッディタウン市民センターを会場に狂言の稽古を行った。この稽古は翌年にも継続し、新作狂言《うばが谷》に出演してもらう予定である。



3. 課題分析や今後の発展性

本事業の課題として、まず民話の内容をそのまま狂言にできるわけではないことが今回明らかになった点が挙げられる。特に題材に選ばれた民話が深刻な内容を持つものだったために、笑いの芸能である狂言とどのように調和させるかが大きな問題となった。結果として、原話を改変したが、これは民話そのものを伝える意味では問題となりうる。また、創作の負荷が大きくなり、結果として全体の計画が遅れた結果、プロのみによるプレ上演（試演）を行うことはできたものの、《うばが谷》によるプロと子供たちの共演は翌年に持ち越す形となった。なお、地域の題材の新作狂言としては、2020年に弊会で制作した新作狂言《くわばら》を、本年も子供とプロが共演する形で上演できている。《うばが谷》についてもそのような作品に仕立てることが目標である。

また、年間を通して多数のイベントを並行して実施したため、運営面での調整や参加者の継続的な関わりを確保することも課題となった。さらに、地域民話の認知度にはばらつきがあり、地域文化資源としての民話をどのように共有し、地域住民を巻き込むかも今後の検討課題である。

一方で、本事業には大きな発展性が見込まれると考えている。地域の民話を現代の子どもたちとともに再解釈し、伝統芸能として新たに創作する取り組みは、地域文化の循環的な継承モデルとして高い可能性を持つのではないだろうか。子どもたちが調査・創作・稽古・上演まで主体的に関わるプロセスは、探究学習や表現教育としても価値が高い。今後は台本作りや子どもたちが使う舞台衣装の一部、小道具などを作るような、より広い範囲の創作への参加の開拓も考えていきたい。

また、能・狂言・講談など多様な芸能を体験する機会を提供したことで、地域に伝統芸能が根付く基盤が形成されつつある。さらに、老母・息子・孫という三世代の物語を扱ったことは、多世代交流の教材としても扱える可能性もあり、地域の文化活動として広がりを持たせることが可能であろう。将来的には、三田市の文化観光資源としての活用や、市外での巡回公演など、地域ブランドとしての展開も期待できると考えている。

4. 代表者又は担当者からのひとこと

このたびはご支援をいただき、誠にありがとうございました。

今回の取り組みでは、三田の民話「うばが谷の水」をもとに、子どもたちと一緒に新作狂言をつくるという、かなり挑戦的な試みに挑みました。参加型だけに結果を操作することは出来ず、深刻な内容を持つ話が題材として選ばれたことは予定外で、全体の予定に影響が出ました。これを狂言らしい「笑い」にどうつなげるかは本当に悩みどころでしたが、プロの狂言方の皆様と相談を重ねる中で、家族の思いやりを残しつつ、ユーモアも入れた形に仕上げることができました。

また、年間を通してワークショップや体験会、稽古を続けたことで、子どもから大人まで幅広い世代が伝統芸能に触れる機会を作ることができたのは大きな成果だと感じています。一方で、イベントが多く運営面の負担が大きかったことや、参加者の継続性など課題も見えました。今回の経験を踏まえて、地域民話の活用や創作への参加の幅を広げながら、今後も地域文化の発展につなげていきたいと思っています。